

長門の国 萩

なんとなくの印象としては、上品で歴史深いと言ったイメージを持っていた萩であるが、いかんせん、山陰の方に行くのははじめてであったので、まあまあ期待だけはしていた。今回の旅のルートは、まず羽田から飛行機で北九州空港まで行き、そこから車で関門トンネルを通過して、下関を經由し、萩へと向かうというものである。

まず下関、下関といえばフグ。あいにく今回は下関のフグを堪能す

ることは出来なかったが、下関もなかなか興味深い場所ではある。宮本武蔵で有名な^{がんにゅうじま}巖流島があるし、あの下関条約の下関である。下関駅に行く途中、目に入ったのが『海峡ゆめタワー』である。この海峡ゆめタワーは全長 153 メートルにも及び、展望室の高さに関しては 143 メートルと西日本の中では最も高い自立型タワーである。展望室は円形となっており、瀬戸内海、関門海峡、巖流島、日本海と 360 度グルッと歩いて、景色を見渡せる。私達が訪れた時は雲ひとつない綺麗な青空であったので本当に恵まれていた。海峡ゆめタワーを見学し、下関駅もぱっちり確認した後、我々は早速、宿泊する萩へと車を走らせた、ところが一向に下関から脱出する気配がない。それもそのはず、下関市というのは県庁所在地の山口市よりもはるかに大きく、中国地方で 5 番目に大きい市なのである。それも高速を一切使わず、ひたすら海沿いを走ったのだから長く感じるというのは無理もない。面白かったのが、海岸線を走って



海峡ゆめタワーから見下ろした下関市



下関市の夕なぎ公園

いる最中、懐かしい光景を目の当たりにしたことである。

「夫婦岩」である。私の祖母は三重県の「二見浦」に昔住んでいて、彼女の家から歩いてわずかのところに「二見興^{ふたみおき}玉神社^{たまじんじや}」があった。そこにある立派な「夫婦岩」があり、よく歩いて見に行ったものである。私に言わせれば二見興玉神社というのは非常に格式のある神社であり、あそ

こでみたあの神々しい夫婦岩の佇まいを忘れることは一生ないであろう。実際、この二見興玉神社は伊勢神宮に次いで三重県内で2番目に参拝客が多いというだけの重鎮感はある。他の人が見たら、ただ岩と岩のあいだに縄をくくり付けているだけの光景に見えるかもしれないが、やはり私個人的に、思い入れがあるだけにおそらく好きな日本の景色で3本の指に入る。夫婦岩というのは、実際



私が調べてみる限り、日本全国に60ちかくもあるとのこと。それも北は北海道から南の沖縄まで全国的にある様である。たまたま車で走っていて、たまたま遭遇したと言った感じではあったが、思いがけず懐かしんでしまった。まさか下関で、夫婦岩を見ろとは思わなかった。あまりに突然のことすぎて、写真に収めることすら出来なかったし、じっくりとその姿を拝むことも出来なかったが、私が幼き頃、ずっと見ていたあの二見浦の夫婦岩がフラッシュバックした。

そして、萩。来たこともないし、正直、そこまでピンと来ないような場所であったが、調べてみると、昔の城下町もあるし、明治維新や吉田松陰を語るうえで欠かせないような所の様である。てっきり、小京都と呼ばれているぐらいなので、京都には及ばないものの上品な雰囲気漂う場所なのかと思い込んでいた。確かに街は静かだし、落ち着いてはいる。ところが、静かすぎるのである。歩いていても、人をまず見かけないし、ましてや若い人に関しては見た覚えすらない。横断歩道の信号を無視すれば、お巡りさんが遠くから優しく注意してくれるぐらい平和である。ホテルだって3階建てで、エレベーターもないし、隣の部屋の音もダダ漏れである。夜、食事に出かけようとしても、店が少ないし、飲み屋だってほとん

んどない。いわゆる繁華街がないのである。ようやく見つけた食べ物屋は満員状態で、食べ終わったお客さんからすぐにお勘定といった感じである。しかし、魚は確かに美味しかった。メジカの煮つけなんかはもう最高だった。私も正直、メジカなんて聞きなれない魚だったし、どんな魚かと思っていた。メジカというのは、正式に言う^{そうだかつお}と宗太鱈

山口県長門市千畳敷の草原



と呼ぶみたいで、口と目が近いことから西日本ではメジカと呼ぶことが多いそうである。とはいえ、やはり訪れたのが4月下旬、魚のシーズンではないし、私の大好物の雲丹だって、もちろん美味しかったが、肉厚ではなかった。これに関しては、海水の温度が高いと、雲丹の食べる海藻が少なくなることにより、肉厚の雲丹が獲れなくなるとのことである。まあ、こればかりはしょうがない。なんせ、ゴールデンウィークをずらすわけにはいかないのだから。ただやはり、ノドグロをはじめ、本場の美味しい魚を一番美味しい時に堪能できないというのは、非常に惜しいことである。今度また良いタイミングを見計らって、こっそり来ようと考えている。



秋市 田中義一像

食べ物以外で、期待していたのが観光スポットである。明治維新とか吉田松陰が有名といっているぐらいなのだから、それなりの史跡であったり、観光するところがあったりするはずである。萩のホテルに到着した日の夕方、連れの者がそそくさと1人どこか遊びに行ってしまったので、仕方なしに私はひとりカメラを片手にぶらぶら歩き回ることにした。松本川という大きい川を通り、ただひたすらゆるゆる歩いていると、松陰神社という看板があるではないか。まあ萩で松陰といっている以上、間違いなく吉田松陰のことだと確信はした。「明治維新胎動地」みたいに言われている以上、これぐらいのことは概ね見当がつく。境内は本殿や松下村塾をはじめ、もう吉田松陰のテーマパーク状態であった。正直、明治維新のことを大々的に取り上げるならまだしも、吉田松陰が果たして、ここまで派手に拝みあげられるほどの人物かどうか私にはわからない。確かに、テレビを見ていて、吉田松陰のことを『先生』と呼んで慕う、評論家だって見たことはある。

日本を守るために勉学に励み、優秀な人材を輩出したような人であるという事は認識している。それ故、おそらく勉強が好きな頭のいい人なんかは吉田松陰のことを敬愛してやまないのかもわからない。境内の中には、吉田松陰記念館があり、館内にはたくさんの蠟人



松陰神社内の石碑
明治維新胎動之地とまで書かれている

形によって、松陰の一生が紹介されている。地方の資料館にしては、すごく手が込んでいた印象を受けた。たしかに、松陰は興味深い人物かもしれない。

阿片戦争で、清がイギリスに惨敗したことを受け、松陰は山鹿素行が提唱した山鹿流兵学がもはや時代遅れであるという事を悟った。これを受け、松陰は1850年に西洋兵学を学ぶために江戸を訪れる。



松下村塾 講義室



ここで松陰は木挽町（現在の中央区銀座1丁目から8丁目の一部）にある「五月塾」を訪れ、佐久間象山の下で、砲術を学ぶ。恥ずかしながら私は佐久間象山という人物を知らなかったのだが、この人もなかなかすごい人物であったようである。門下には、松陰以外にもあの勝海舟や坂本龍馬までいたというのである。1853年にはじめてペリーが浦賀に来た時も松陰は象山と一緒に黒船を遠くから観察していたという。象山に後押しされ、松陰はま

ます外国に対して憧れを抱くようになる。そして、プチャーチンのロシア軍艦が長崎に寄港するとなった暁には、こっそり乗り込もうと考えていたものの、クリミア戦争の影響で、早くに出港になった事を知らず、乗り損ねたとのことである。あきらめきれない松陰は、1854年に、日米和親条約で再び来日したペリーの軍艦に、弟子の金子重之輔と一緒にまた乗り込もうとするが、失敗し、あっけなく伝馬町老屋敷に入獄されることとなる。この時には象山も連座され、おなじく入獄することとな



松陰神社 本殿
昼時は混雑しているが、夕方になると比較的静か

る。記念館に、松陰が監獄の中で勉学に励んでいる蠟人形もあったが、正直、ちょっと変わった人だとはおもう。出獄を許された松陰は1857年に、あの「松下村塾」を建て、多くの若者を教育する。ここで教育の仕方というのが、その所謂机の上での学問にとらわれず、全員で一丸になって体を動かすと言ったものである。今でいうまさに理想の教育スタイルといえるのかもしれない。そう考えてみると、松陰がどれ



萩 城下町

だけ『先生』として、今の教育に影響を与えたかがわかる。わずか2年という実に短い開塾期間の間に、伊藤博文や山形有朋、やまがたありともその他明治維新を成すこととなる人物達を世に輩出させたわけである。そして、あの有名な日米修好通商条約が日本の安全を脅かすと松陰は考え、老中暗殺を計画する。これにより、松下村塾は閉塾、松陰もまた投獄されることとなる。結局、松陰はその後、東京の小伝馬町の老屋敷で処刑されることとなる。まあ、確かにこの波乱万丈な経歴は神格化されるのも納得はいくし、考え方によっては、今の日本があるのも、もしかしたら松陰のおかげかもわからない。しかし、やはり『松陰神社』というのはいかかなものかと思う。それに、よくわからないのがこの『松陰神社』が東京の世田谷にもあるということである。『松下村塾』もこの東京の神社にあるというのだから、なおさらわけがわからない。吉田松陰をここまでして、神様みたいに敬うのは、正直、理解に苦しむ。境内には吉田松陰の記念館が2つもあるし、吉田松陰のコスプレをした人が松陰の人生を紙芝居で子供に聞かせている光景だって目の当たりにした。もはやここまでくると結構痛々しい。日本史の知識に乏しい私が言うのも悪いが、正直、ここまでくると非常に滑稽である。

萩といえば城下町が非常に有名である。何せ、世界文化遺産に登録されているぐらいである。宿泊するホテルから、そんなに歩かなくても見に行けるといっているので、早速、行ってみたはものの、たいして何も

もない。当時の面影がそのまま残っているというのが宣伝文句のようだが、そんなこと言われても正直わからない。木戸孝允の生家や、伊藤博文と何か縁のあるという神社等々、貴重と謳っている建物が点々とあるといった感じであった。こういった場所を大々的に開放するならまだし



も、いちいちそれぞれの建物に入る度にお金を取るのである。こんな姑息なやり方は、正直どうかと思う。いくら世界遺産とはいえ、申し訳ないが、それほどたいしたものには思えない。極めつけは萩城跡。萩市民は入場無料で、はるばる遠くから来た観光客からはきっちり入場料を取るのである。確かに、そこまで高い額ではないにしろ、訪れたのが朝早いという事もあったせいか、私自身少々イライラしており、とてもではないが中を見学しよう



あちらこちらに萩焼の工房がある

と思う気持ちにはならなかった。こんなこと言うては何だが、あくまで城の跡にすぎず、城なんてもうないのである。敷地に足を踏み入れることぐらい、自由にさせても良いはずである。なんだか自分たちが明治維新か何かで一役買ったと言いたいような振る舞いにもとらえられかねない。田舎にしては少々凶々しすぎると感じる。すこしばかり、地域活性化や盛り上げ方を見直した方がいいのではないかというのが私の率直な意見である。

明治維新を成し遂げたという事を誇りに思っている割には、日本人ならではの謙遜さというものに少々欠けているのではないだろうか。まさにあの萩焼のように落ち着きのある、静かな上品さをもっとうまく生かしていけばいいのにはと思う。私だって個人的には、九谷焼や清水焼よりかは萩焼派である。そう考えると、私だってますます悔しくなってくる。地元の人曰く、建物を建てるにしても、高さが制限されているというぐらい、市は景観に気を使っているそうである。そこまで、自分たちの街を気遣い、



道の駅で見たトラフグ

大切にしているのであれば、あとは人を引き付けるような「魅力」を何とかするべきと感じる。例えば、人で賑わうような繁華街や商店街だって大事なわけで、どんなに古風漂う街でも、やはり人がいなくて「死んでいる」と思われていたら、それまでである。もっと活気に満ちていて、明るい街づくりができるよう、市も努めなければならない。

ウェバー伊安